句集
風紋
高橋和女

あの流れのような砂上の
紋様は、自然の持つ優しさと
厳しさの刻印と言っ
て良い。

風紋の
音なく流る
帰燕かな

安立公彦
(作詞者)
蓬摘む遠き記憶の水車小屋

祠なる深き闇より梅香る
花の影 逢うて 昔の戻りけり
上り框高き 生家や 蚊遣 香花 影や 逝きたる 君の老 ゆるなし
戦没の 兄の 忌日は 春と のみ
戦の愚語を継ぐべき虫の夜
人声を溜めて重たき夕牡丹
春愁の喉見せて蹄く羊かな
母逝きて身の秋に打つ句読点
戦の愚語り継ぐべき虫の夜
書き込み多き亡母の聖書や冬灯遺されし母の扇子に母の風海苔焙る律儀な夫の三日かな松の芯叙勲の夫を眩める

観音ノ小寺ノ僧ノ僧ノ僧ノ僧

観音ノ小寺ノ僧ノ僧ノ僧ノ僧

観音ノ小寺ノ僧ノ僧ノ僧ノ僧
裁くものは我
声のかなたの春の闇

空港反対派に家を焼かれる

夫に謂ふ

いふなれば
君は桔梗
吾は風

身に入むや
辰雄旧居
の椅子二脚

鰭酒や
夫の十八番の歌「昴」
歓びを分つ夫とて花種を
仰ぐ面影を身に添せつつ
秋風や遺影に聴かすローリング・ストーンズ

露燻々ピエタの泪に満てり
花仰ぐ面影を身に添せつつ
母の日や亡き子に手向く貴腐ワインカルヴァレの空を建てきし奴反射鏡春のニンフを舞せけりモナリザの笑みを湛へし古雛
新世紀の到来

半旗を掲げ

とんがり枝

花嫁の腕

薫風や

新世紀の到来

花鳥か

とんがり枝

花嫁の

薫風や

とんがり枝

花嫁の

薫風や
秋扇に師の墨痕の平家琵琶
白日傘真砂女の路地を曲りけり
桜懸りに待つ人のあり天の河
アイガー北壁天を切り裂く良夜かな
今日のごと明日あらばよし風薰る

灯台は白き女身や風光る

風紋の音なく流る帰燕かな

終章は神の掌にあり冬夕焼
殉ると言ふは美し流し雛過去といふ確かるもの広島忌戦後長し生かされ仰ぐ良夜かな障子貼て夕日のやはらかし

観音にかど雨しほほよも母を手にとのどが

惡の門にのとある恐ろしくぎみと
毛糸編む 手を止め夫の寝息く
埋み火を消すな 夢に亡き子かな
綾絹で拭くみほとけや年惜しむ
埋み火を消すな 夢に亡き子かな

初鶏や紫煙仄かに峡一戸
花影
明日
逢ふと
衣桁に
掛けし
花衣

春
愁
の
半
旗
や
仏
蘭
西
大使
館

女
振り
上の
たつ
も
り
春
帽
子

ゆっくり進む
車椅子
著者略歴
高橋和女（たかはし・かずじょ）本名和子
1930年 島根に生まれる
1951年 旧制青山学院女子専門学校 国文科卒業
1985年 「春燈」に入会。安住敦・成瀬操子・鈴木栄子・安立公彦先生に師事
1995年 「春燈」廻下集（同人）に入集
俳人協会会員